5万分の1地質図幅の新刊

奥尻島北部及び南部
OKUSHIRITŌ HOKUBU AND NAMBU

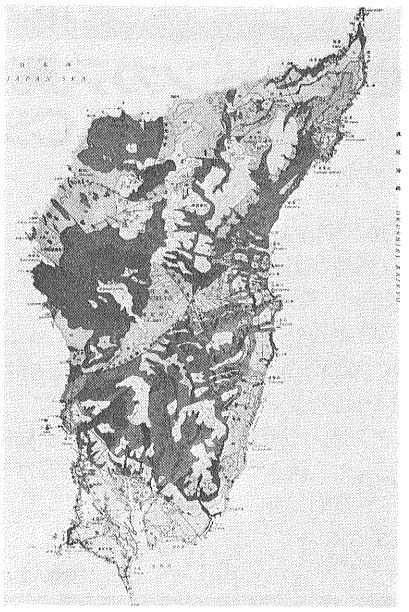
5万分の1地質図幅
地域地質研究報告

著　者　秦　光男　瀬川秀良　矢島淳吉

発　行　工業技術院　地質調査所

取扱先　東京地学協会　(03)261-0809　262-1401
そのほか全国主要書店

販売価格　2,510円



奥尻島は　北海道渡島半島のほぼ西端に当たる久遠郡帆越岬の西方約18 kmの日本海上の島で　周囲約60 km　面積約144 km²ある．　奥尻島には室津島　無縁島　トド島　沖のハッピをはじめとする多くの小島や岩礁が付随しており　海産物の豊富なところとしても有名である．

奥尻島の地形図は　奥尻島北部と奥尻島南部の2葉となっているが　利用者の便宜を計り「奥尻島北部及び南部」図幅として一枚の地質図にまとめられている．

奥尻島地域は　いわゆるグリーンタフ地域に当たり　白亜紀の酸性な火山活動によってもたらされた奥尻層　藻内火山岩類とこれらに迸入する深成岩類を基盤岩とし　新第三系の地層が広く分布している．　また　更新世から完新世に至る海成段丘が数多く美事な発達をなしている．

基盤岩をなす奥尻層及び藻内火山岩類は　主として流紋岩の火山活動による産物で　前者は流紋岩の火山砕屑岩と小量の砂岩及び泥岩からなり　後者は流紋岩溶結凝灰岩を主とし　上部に安山岩溶岩を伴っている．　これらは花崗閃緑岩を主とする深成岩類の上位にルーフペンダントとして存在し　熱変成を受けてホルンフェルス化している．

深成岩類は　中粒のほぼ均質な岩相を示す角閃石黒雲母花崗閃緑岩が主体で　部分的に花崗岩　石英閃緑岩等の岩相を含むが単一の岩体と見なされる．　なお　幌内地域では斑れい岩のゼノリスを伴っている．　花崗閃緑岩の黒雲母によるK-Ar年代測定で95.8±3.1 Maという値が得られている．

新第三系は　下位から青苗層群（松江玄武岩層　烏頭(ぶし)川層　青苗川層）釣懸(つりかけ)層　千畳層　米岡層　仏沢層　神威山層及び勝澗層からなっている．

青苗川層群の地層は　いずれも火山噴出物を主体とし　小量の砂岩　泥岩及び褐炭層を挾有する地層で　更に青苗川層中には溶結凝灰岩が認められるなど　その堆積環境は陸域であったと推定されている．　これらは　いわゆる下部グリーンタフに相当するもので　産出する花粉化石からその時代は前期中新世といえる．

前期中新世末から鮮新世にかけての釣懸層　千畳層　米岡層及び仏沢層はいずれも海成層で　下位の青苗層群と基盤岩に対してアバットする形態で不整合に覆って発達している．主な岩相は釣懸層が浅海性の砂岩及び泥岩　千畳層が珪質頁岩　米岡層がシルト岩一凝灰質砂岩と安山岩火山砕屑岩からなっている．　各地層からは海生の貝　有孔虫　放散虫　珪藻化石等のほか花粉化石も多産しており　その時代区分と渡島半島地域との対比も明らかとなった．　なお　釣懸層から産出する巻貝の *Vicarya yokoyamai* は　その北限産地として有名である．

後期鮮新世の神威山層と勝澗層は　いずれも陸域において堆積した地層で　前者は神威山を中心に活動した安山岩の火山噴出物からなる．　後者は湖沼成の堆積物で　下部は礫岩及び砂岩　中部は沈澱成の硫黄鉱床を伴う泥岩　上部は流紋岩溶岩を伴う凝灰質砂岩からなっている．

海成段丘は11段あって　形成過程を含め各段丘の堆積物についても詳しく記述されている．　なお　標高400m以上の高高度の段丘形成とその保存状態は　対岸の渡島半島地域では認められないもので　興味ある地史を含んでいる．

地質ニュース　第342号　2月号
定価 ¥540　〒実費

昭和58年2月1日　発行
編集　工業技術院地質調査所
発行人　林　久　雄
発行所　株式会社　実業公報社
印刷　東京都千代田区九段南4の2の12
Tel. (05) 269-0951 (代表)
振替口座　東京1-32466
総発売元　株式会社　実業公報社
出版事業部

©1983 Geological Survey of Japan